

ITUの標準化局長への就任

稲宮 健一

この度、国際電気通信連合（ITU）の標準化局長に尾上誠蔵氏が就任した。これは日本にとって慶事である。ITUは国連傘下の無線通信の詳細な取り決めをできる機関である。基本は世界中で使う無線通信の周波数の割り当てであるが、さらに各国が共通でつかえる信号の形式を定める。これが標準化である。勝手に使うとお互いに干渉を起し無線通信の混乱を起こす。

身近な例で、ラジオ、テレビ、地上の各種無線通信、宇宙通信等の電波の周波数の割り当てがある。割り当てに則って国内のテレビは製造されているので、そのまま受信機を欧州に持っていったとしても使えない。これは地域の産業結び着いた例があるが、国際電話や、インターネット回線は世界共通で使用でき国境の壁はない。通常の国の政策は各国の独自の方針に従って決められ、他国から干渉されるのは内政干渉として排除されるが、電波は国境を超えて伝わるので決められて方式に従わないと送受信ができない。

戦後固定電話が主流の頃はマイクロ波と同軸ケーブル網、交換機の有線通信が主流であった。一九九〇年代の無線による携帯電話第一世代（1G）が現れて、二〇〇〇年代の2Gに文字情報を送れるiモードが現れ、日本は先頭を走っていた。しかし、二〇一〇年代の3Gにスマホが出現しアップルや、サムソンの独壇場になった。そして、二〇二〇～三〇年の5G、6G代は高速大容量、リアルタイム性の向上、多くの情報源接続できる多元接続など高度な社会を実現するための基幹となることが目標である。さらに、それに適合するICチップなど、産業界への影響は未広がりである。

局長として新分野をリードして行くにはしっかりと語学力と、相手を説得できるある種の図太さが必要である。国内では協調を旨として、飛び出た発言を控えがちである。しかし、国際的舞台では相手の理解が得られるように自己主張の論陣を張り、次世代の新しい無線通信の確立に尽力することを期待する。